

巻頭言 「大学教育再生加速プログラムの中間評価を迎えて」 教育・学習支援センター長 望月雅光 ……1
[GCP] 2017年度後期の活動 ……2
[SPACE] 2017年度後期学習セミナーの受講状況/SPACE公開学習会を開催……3
[WLC] 2017年度後期の活動……4
[CETL] 2017年度後期の活動……5
2017年度後期FDセミナー（学士課程教育機構主催）……6
学部での実践紹介……7
ニュース・トピックス……8

大学教育再生加速プログラムの 中間評価を迎えて



教育・学習支援センター長 望月雅光

大学教育再生加速プログラム（AP）事業は、平成26年度から開始された補助事業である。本学は、同年にテーマⅠ、Ⅱの複合型に採択されている。この複合型は、テーマⅠのアクティブ・ラーニング（以下、ALという）の導入とテーマⅡの学修成果の可視化の両方について事業を推進する必要がある。本学の場合、すでに十分に導入されているAL型の講義の質向上とアセスメント科目と呼んでいるアセスメントを実施するための科目等を用いて学修成果の可視化を行う。本事業の開始当初は、5年間の補助期間であったが、途中、補助期間が1年間延長され、6年間の補助事業となっている。補助期間が延長された際に、その条件として、入口（入学時）から出口（卒業時）までの質保証が求められたため、当初の計画に、①初年次教育の改革推進、②IR室と協働した学生調査の拡充、③学びの集大成資料づくりの3項目を加えている。この補助期間の延長の影響もあり、平成29年度に中間評価が実施されることになった。

本学の中間評価の結果は、残念ながらS評価ではなく、A評価（計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる）であった。

優れた点として、「FDの着実な実施やピア・アセスメントスタッフの体制構築を展開できている」、「授業設計研修への教員の参加率がおしなべて高い」、「教育成果の発信にはもとより積極的であり、FD講師派遣の実績からも他大学の注目を集めているものと判断できる」等の大きく3点があげられた。ここで注目したいのが、合宿研修への教員の参加率である。参加の対象になる教員217名中185名が参加しており、85.3%の参加率になっている（平成29年度末時点）。この数字が実現できたのは、本学教員の一人ひとりの教育への情熱が源泉になったからだと考えている。

しかしながら、改善を要する点については2項目も指摘されている。一つは、「任意の指標にある『優れたリーダーシップを持つ学生』とはどのような学生であり、どのように評価・認定されたのかを明示することが必要である。」であり、もう一つは、「評価体制は整備されているが、評価の観点や、学修行動調査や学修到達度テス

トの結果が、新たな方針策定にどのように反映されたのかが明らかにすることが必要である。」である。この2つの指摘について、検討してみる。

一つ目の指摘については、最初の計画調書には、課題として、新たに自己評価・相互評価を効果的に進めるスキルを持つリーダー学生の量的拡充が必要であると、その対応として、「AL導入科目において効果的な教員・学生支援ができるSA/TAの育成を強化する。特に、学年進行に沿って学生自身が自らの学びを振り返り、状況に応じて目標や学習計画を柔軟に変更し、自らの学修を確かにする、自己評価を支えるピアサポートの集中研修を行う。また、研修とピアサポート経験によって段階を設けた課外講座のスタッフ養成プログラムの開発を行う。プログラムを修了した学生にはシニアSAなど学内インターンシップに参加する機会を与える。」としており、優れたリーダーシップを持つ学生を明確にしている。しかしながら、優れたリーダーシップを持っているかどうかを評価し、それを認定する仕組みが明確でない点については、確かに不明確なところがあり改善が必要である。例えば、認定基準の策定と認定書の発行等が考えられる。

二つ目の指摘については、新たな方針策定にどのように反映されたかどうかが、調書に記載されていないという指摘になる。中間評価の調書には、出口に向けたキャリア教育の改善に加え、入口の改善として、平成30年度から実施の新しいカリキュラムでは、文系5学部の基礎演習科目を共通科目に移しつつ、基礎科目群を新設して、より柔軟に初年次教育を実施する体制を整えた旨、記載している。また、PDCAサイクルを意識して、事業を推進できており、アセスメントの結果は、学内で共有され、学長のリーダーシップのもと教育改善が進められている。審査する側がなぜこの指摘をしたのか、時間を置いてあらためて考えたい。今の時点では、これ以上の成果が求められたと推測し、AP事業を推進していくしかないであろう。

以上、AP事業を推進しているAP推進本部の一構成員として、中間評価の結果を受けての個人的な考えを述べた。

第5回GCP修了式を開催、28名がGCPを修了

GCPコーディネーター 佐々木 諭

第5回グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）の修了式が、3月17日（土）に開催され、馬場学長より4期生20名と5期生8名の計28名にGCP修了証書が授与されました。今年度修了したGCP生は、国内外の大学院進学、国際的な優良企業への就職、外務省専門職員採用試験、地方公務員採用試験の合格など、目覚ましい進路結果を勝ち取りました。

修了生を代表して外資系証券会社に採用された青木広平さん（GCP4期生・経済学部卒業）と英国大学院進学予定の越智理佐子さん（GCP4期生・教育学部卒業）が代表挨拶を行いました。

青木さんは、「世界を舞台に活躍する人材に」との決意で挑戦を続け、米国マサチューセッツ州立大学ボストン校に留学しました。留学中も徹して勉強に挑戦し、留学中に履修したすべての科目で最高評価を獲得しました。帰国後は、新たに開設された「滝山国際寮」の寮長として、新入生をはじめ留学生の生活サポートにも努めました。

「この道は、創価大学およびGCPでの学びがなければ間違いなく進めなかったものです。振り返れば、『世界を舞台に活躍する人材に』との思いを実現する道をGCPのおかげで進むことができました」と述べました。

越智さんは、在学中にフランスの交換留学を経験し、2017年7月には、オーストリアのウィーンで開催された、「世界大学総長協会総会」にも参加しました。会議では、ハ

ーバード大学等の教授らと共にセッションにも参加しました。「大学における教授と学生の関係」がトピックに上がった際に、創価大学における「学生第一の精神」について説明し、「創価教育は、学習者の幸福を実現することを目的としており、知識を教授するだけでなく、その知識を何のために使うのかという知恵も示して下さる教員たちがいる。一人ひとりの可能性をどこまでも信じて下さるから、学生も教員を信頼し尊敬するという関係性が築ける」と堂々と語りました。

「今、私の夢は、自身の教育という専門とフランス語の利点を生かし、国際機関に勤めて、教育を軸に様々な社会問題を解決することです。人々の可能性を開く鍵は教育であるという確信に基づいて、創価教育の価値を世界中で体現してまいります」と感謝と決意を述べました。

現役のGCP生も、GCPで鍛えた力を存分に世界で発揮しています。「国際開発ユースフォーラム2018」、「持続可能な開発のためのハイレベル政治フォーラム」、「日本・中国青年親善交流事業」、「内閣府青年国際交流事業」等に日本代表として参加し、世界の学生らと友情を深め合っています。

今年4月には、9年目を迎えたGCPに、あらたに32名のGCP9期生を迎えました。それぞれが大いなる目標を持ち勉学に挑戦しています。GCPの伝統を受け継ぎ、新しい発展を担いゆくことを期待しています。



馬場学長、田代理事長と記念撮影に納まるGCP修了生



「世界大学総長協会総会」に参加したGCP生（右から青木さん、越智さん）

SPACeでは、学生のスキルアップのための講座を学習セミナーとして、ほぼ毎週開講しています。ここでは、2017年度後期の学習セミナーの受講状況をまとめました。また、教員対象に公開学習会も開催しましたので、合わせてご報告します。

2017年度後期学習セミナーの受講状況

2017年度後期は表1のように学習セミナーを開講し、今までのセメスターの中で最も多くの学生が参加しました。過去の学習

表1 2017年度後期学習セミナー参加者数

セミナー名	出席者数
誰でも実践できる GPA向上セミナー	27
試験勉強がラクになる?! 効率UP! うまい勉強の仕方	3
初心者の方大歓迎! 1から教える簿記3級講座①②	22
今から差をつけよう! SPI非言語 対策講座①~⑤	10
印象UPで成績UP! Wordの使い方・設定の仕方	12
プレゼンはこれで勝つ! Power Pointの活用法	4
0から100まで教える! 韓国語講座①~③	24
0から100まで教える! 韓国語講座-初級①~⑦	17
0から100まで教える! 韓国語講座-中上級①~③	6
短期集中! 中国語検定 合格講座①②③ ~準4級・4級向け~	19
留学生対象 計画的に進めよう! 日本語能力試験N1 準備号	8
留学生対象 問題に慣れよう! 日本語能力試験N1対策 セミナー①~④	47
最近あの子大丈夫かな? サポートしたいあなたのための上 手な声の掛け方・関わり方	5
チームの雰囲気ぐぐっと変わる! ファシリテーション入門	7
これでミーティングもばっちり! ファシリテーション応用	8

セミナーの参加状況を考慮に入れ、学生のニーズに合わせたセミナー内容を企画したこと、企画段階からセミナーに参加してもらいたい対象者を明確にしたことが参加者増加につながったと考えられます。1回の開講で最も参加者が多かったのは、「誰でも実践できるGPA向上セミナー」でした。

参加者のアンケート回答数198のうち、セミナーを受講して「すごく良かった」は130、「良かった」は67という結果でした。どういう点が良かったのかを集計したもの（複数回答可）が表2です。セミナーへのコメントの中には、より具体的な資格試験の勉強方法や、実践を踏まえた内容を希望するコメントも多く見られました。これらの結果を踏まえ、2018年度も学生の学習支援に役立つセミナーを開講していく予定です。

表2 学習セミナーに参加して良かった理由

理由	回答数
①内容が期待とマッチしていた	99
②新しい知識・情報を得られた	152
③内容の難易度がちょうど良かった	94
④講師の説明がわかりやすかった	108
⑤スライドや配布資料がわかりやすかった	59

SPACe公開学習会を開催

2018年2月19日（月）に早稲田大学国際学術院教授佐渡島紗織氏を講師としてお迎えし、「全学で支える学生の文章力向上支援の方策」をテーマにSPACe公開学習会を開催しました。この学習会は、SPACeで運営されている日本語ライティングセンターと学部との連携を深め、教員が学生の文章力を向上させるにはどうすれば良いのか、具体的な支援の方法について学ぶことを目的に開催されたものです。当日は17名の教員が参加し、実際に学生の書いた文章や自身の書いた文章を使って、実践的に学びました。

佐渡島氏は、早稲田大学にライティングセンターを立ち上げ、以来全学の学生のライティング指導に取り組んでこられたご経験から、まず、「学術的な文章を書く目的」について確認されました。続けて、学生の文章を観点別に診断し、コメントをつけるワークショップが行われました。参加者は、ワーク毎にペアで診断結果を見せ合い、なぜその観点が重要なのか、どういう助言が書き手の自立を促すのかについて話し合いました。

日本語ライティングセンターでは、書き手一人ひとりの状況に

応じて、対話を通じて書き手自身が文章を直せるように支援するチュータリングセッションを行っています。最後に参加者全員がチューター役と利用者役の両方を体験し、学習会を終えました。

参加者からは、具体的な観点が分かり、今後の学生支援の参考になったとの声が寄せられました。



■2017年度 WLCイングリッシュフェスティバル

今回2度目となるWLCイングリッシュフェスティバルが、11月17日に開催されました。3名から成る参加チームは優勝者に与えられるゴールデントロフィーと上位3チームに贈られる図書券を巡って熱い戦いを繰り広げました。

各チームはまず、語彙の豊富さと素早い指の動きが物を言うコンピュータボキャブラリーゲームに挑戦。観衆は大きなプロジェクターに映し出される接戦に声援を送りました。次はその場で会話を訳すスピード翻訳。会場はし



んと静まりかえり、観衆も2名のWLC日本人英語教員審査員も、より良いフレーズに訳そうとするチームメンバーの白熱した競技に汗を握りました。最後に各チームが事前に提出していたショートスキットの鑑賞会が行われ、会場は笑いに包まれました。編集・演技共に素晴らしいウオリティーの作品に拍手が鳴り止みませんでした。

最終的にチームスーパーマスターアソシエーションが優勝。2位にザ・キャバシティーズ、3位にテンタティブリー・ブライトガールズという結果になりました。昨年に比べ今回は約2倍の7チームが参加。多くの観客の喝采を浴び、エネルギーに満ちたフェスティバルでした。

その後、氏はルワンダ虐殺について説明され、JOCVが教員教育やインフラの整備等を通してルワンダの再建に大きな役割を果たしてきた点を述べられました。ご自身も現地の高校で数学と物理教育、科学クラブの立ち上げ、研修旅行の導入にご尽力されました。最後に、JOCVプログラムの一環である文化交流を通じてルワンダの豊かな文化を知り、人々と共に生きる事、夢を持って自分自身に挑戦する大切さを学んだ経験を話され、ルワンダの現在の発展を過去と比較説明された後、質疑応答の時間となりました。当日は約100名の学生が参加し、大変有意義な学びの時間を持つ事が出来ました。

■第12回Global Lecture Series JICA プログラムと市民参加 青年海外協力隊ルワンダOV会 会長 松山匡延氏

11月21日、講演に先駆けてランチタイムプレクチャーが開かれ、参加した学生20名は背景理解の鍵となるボキャブラリーやルワンダ紛争の歴史を学び、JICAとJapan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV)についてのビデオを2本鑑賞しました。講演の冒頭、松山氏は未知の世界を知り異なる意見を学び自己を改革したいという思いからJOCVに入った事を話され、JICAが日本のODAの一環として国連のミレニアム開発目標と持続可能な開発目標到達のために貢献している事を説明されました。次に「もしも世界が百人の村だったら」という参加型デモンストレーションを通して学生に世界の人口・健康・富など多岐に渡る分野の偏った現状と、人間の安全保障や開発の要は教育である事を訴えられました。

その後、氏はルワンダ虐殺について説明され、JOCVが教員教育やインフラの整備等を通してルワンダの再建に大きな役割を果たしてきた点を述べられました。ご自身も現地の高校で数学と物理教育、科学クラブの立ち上げ、研修旅行の導入にご尽力されました。最後に、JOCVプログラムの一環である文化交流を通じてルワンダの豊かな文化を知り、人々と共に生きる事、夢を持って自分自身に挑戦する大切さを学んだ経験を話され、ルワンダの現在の発展を過去と比較説明された後、質疑応答の時間となりました。当日は約100名の学生が参加し、大変有意義な学びの時間を持つ事が出来ました。



■WLCプロフェッショナル・ディベロップメント①

11月8日、ウルグアイ国立教員養成大学・ラテンアメリカヒューマンエコノミックセンターのガブリエル・ディアス・マツジョーリ客員講師によるプロフェッショナル・ディベロップメント・セッションが開催されました。講師は社会文化的学習理論を教員学習に応用することを主に研究されています。「グローバル英語教育はどれほどグローバルなのか」という表題でレクチャーは始まり、学生のフルエンシーの伸ばし方・やる気を起こさせる方法・教育方法論を教員に教える意義・有効な教員養成法・カリキュラムの組み立て



方など、話題は全教員共通の様々な分野に及びました。参加者は自身の教員生活の中でこれらの課題にどう取り組んでいるか振り返りました。続くディスカッションでは日本の大学の状況は他の国々とのような類似点、また相違点があるのかという点について活発な意見が交わされました。

偏りのないレクチャー内容と、普段耳にすることのない他の教員の意見を聴く良い機会になった点が高く評価されたセッションとなりました。

■WLCプロフェッショナル・ディベロップメント②



秋学期には円滑なコミュニケーションを成立させるための鍵であるフルエンシーを主題に更に2つのプロフェッショナル・ディベロップメント・セッションが開催されました。9月にはサム・ブルース講師がクラスのウォームアップとして人気の高いクイックトークというアクティビティを紹介しました。パートナーを次々に変えながら、クイックライティングのトピックについて何度も繰り返し話すというもので、新しく学んだ表現やプレゼンテーションスキルの練習にもなる他、ポール・ネーションの提唱した簡単な英語に大量に繰り返し触れるというアプローチにも適うものです。10月にはキャメロン・ハイ講師が、アイデアを繋げる・異なる視点を提

唱する・話し手に迅速に反応するなどの対話機能を活用して、生徒中心のディスカッションをより高いレベルへと導くスキャフォールディングの方法をインタラクティブな形で紹介しました。聴衆は自らディスカッション参加者の役割を体験し、その後、特にアセスメントの観点から自身のクラスにこのテクニックをどう取り入れられるか話し合いました。両セッション共多くの教員が参加し、好評のうちに幕を閉じました。こういった有用な情報をWLC共有の財産として管理・活用していきたいという意見も寄せられました。



創価大学FDガイドブック Vol.1 の発刊について

本学のFD活動の集大成の一つとして、FDガイドブックを作成しました。内容は、第1章 創価大学におけるFDの基本方針、第2章 授業設計とシラバス、第3章 授業運営の工夫、第4章 学修成果の可視化、第5章 継続的な授業改善、第6章 アクティブ ラーニングの技法解説の全6章から構成されています。

今回は、Vol. 1として発刊しています。Vol.2は、実践編として、本学での先進的な授業の実践例の紹介をする予定です。なお、本ガイドブックは、AP事業の取組の一つです。



CETL派遣出張報告

第24回大学教育研究フォーラムに参加して

3月20日、21日に京都大学で開催された第24回大学教育研究フォーラムに参加しました。

本フォーラムで注目したのは、シンポジウム「人工知能に代替されない能力とその教育を考える」(パネリスト：松原仁氏(公立はこだて未来大学)・河野哲也氏(立教大学))です。

松原氏は、現時点では人間がAIより、①枠組み外(想定外)の状況への判断・例外処理、②新たな枠組み・価値の創造、③枠組みの変更・実施、という点で優れていると述べます。ゆえに人間とAIの役割分担を適切に行えば、人間もAIも相乗効果で賢くなると予測し、だからこそ、AIとの役割分担を見据えた人間の教育が重要だと主張されました。

河野氏は、人間はこの役割分担により、AIを利用して仕事を面白いものにするとの肯定的な解釈をされました。そして、AIが担えない分野の「基礎学力」

■ CETL特別センター員 森川 由美

として「思考力」と「対話力」が必要になるという主張でした。この「思考力」とは、調査したり他者に助言を求めたりすることを含めた複合的な能力であり、「思考」の対義語は「習慣」だということです。習慣に従っている時には「問い」が生まれないと「思考」と「問い」の関係を捉え、「習慣」から離れて「思考」する機会を「対話」と捉えます。つまり、「思考」は教授者により用意された「問い⇒答え」という従来の学校教育でよくみられた学習過程とは異なります。さらに、河野氏は有意義な「コミュニケーション」は「対話」であり、「思考」が伴うために自分と他人が異なることに価値を知り、自己をみつめる過程になると語られました。

本シンポジウムでは、アクティブ・ラーニングにおける学習者の「コミュニケーション力」育成と「思考力」強化の関係を深く考えさせられました。

CHILO Book作成実習に参加して

6月17日(土)に帝塚山大学で開催された『最新版のCHILOプロデューサー V3.0を使ったCHILO Book作成実習』(主催：NPO法人CCC-TIES、共催：大学eラーニング協議会)に参加しました。約3時間の実習に参加すると1本のビデオファイルから電子書籍「CHILO Book」を完成させることができるようになります。CHILO Bookの制作は、EXCELのシートに必要な情報を記載すれば、CHILOプロデューサーが電子書籍を生成してくれます。実際に1冊の電子書籍を作ることができました。

今後、アクティブ・ラーニングの導入が進むと、反転授業を実施した教員のニーズも増えてくると予

■ CETL特別センター員 縄田 咲紀

想しています。これまでもCETLに授業改善のために反転授業の導入について何度か相談がありました。その時は、パワーポイントの動画の作成機能を紹介して対応しました。このCHILO Bookは、条件が整えば、パワーポイントを使って教材を作成するよりも手軽に予習用の教材を作れます。しかも、作成した電子書籍はプラットフォームを選ばないため、スマートフォン上での活用にくわえて、Moodle等のLMS上でも活用できます。

今後、反転授業の相談があった場合には、選択肢のひとつとしてCHILO Bookも紹介していきます。

第4回FDセミナー

9月29日(金)、岡山理科大学工学部講師の松尾美香氏を講師としてお迎えして、2017年度第4回学士課程教育機構FDセミナーを開催しました。

松尾氏は、「レジリエンスを育む身体的活動を伴うアクティブ・ラーニング」をテーマに、①自然体験や野外活動を活用した取り組み、②附属高校との連携事業、③新入生オリエンテーション、及びスポーツ科目での実習の事例等について講演されました。

具体的には、キャリア教育を専門とされており、学生が卒業後も挫折に対処出来ることを希望してこのプログラムを取り組み始めたことや自然体験等を活用した授業によりレジリエンス（回復する力）を培うことが出来るとの先行研究を参考に授業を行い、実際に効果があった事例等についてお話いただきました。

参加者からは、「危機感を感じさせることが、意外にも学



生の成長を促すという点が参考になりました」「座学での授業においても一部でも活用できるように考えたい」等の声が寄せられました。

第5回FDセミナー



11月10日(金)、関西学院大学教授の朴勝俊氏を講師としてお迎えし、2017年度第5回学士課程教育機構FDセ

ミナーを開催しました。

講演の冒頭、聴衆を引き付ける技法の一つとして、「落語」を披露いただきました。続いて、「心をつかむプレゼンテーションの技法」をテーマに、①従来のスライド（PPT等）の一般的な使用方法に対する問題提起、②スライド作成の改善及び具体的なアドバイス、③プレゼンの事例紹介、④良いプレゼンの要素等について講演いただきました。

講演の内容は、非常にわかりやすく、参加者の興味を引くものであり、教員の授業や学生の発表のために参考になることが伺えました。

参加者からは、「短い時間で伝える工夫が様々あることを知り、興味深かった」「新しいパワポの概念を学べて勉強になった」等の声が寄せられました。

第6回・第7回FDセミナー

11月24日(金)と12月15日(金)に、「特色ある授業実践から学ぶ」と題し、第6回・第7回FDセミナーを開催しました。

本セミナーでは、各学部からの代表教員が日頃の授業の取り組みにおける効果や今後の課題について報告しました。（事例報告の内容・報告者は一覧の通り）。

参加者からは、「様々な授業改革の具体的な取り組みを知り、今後の授業に応用出来る視座を得ることができた」「英語を用いた授業をどう構築すべきかについて、大きなヒントを得ました」「LTD・反転授業・PBL等、各授業やプログラムに応じた工夫を学び、自らの授業でどのように活用できるかを考えながら聴くことができた」等の声が寄せられました。

<第6回FDセミナー>

- 多人数授業におけるアクティブ・ラーニングの模索（経営学部：大場隆広准教授）
- PASSの概要と活動事例（教育学部：富岡比呂子准教授・戸田大樹講師）
- 国際的な質の保証への取組：国際教養学部の事例報告
（国際教養学部：小出稔教授）
- 情報システム工学科におけるプロジェクトスタディーズの取り組みについて
（理工学部：篠宮紀彦教授）

<第7回FDセミナー>

- 数理科目での反復演習によるアクティブ・ラーニング
（経済学部：中田大悟准教授）
- TEDを素材としたアクティブ・ラーニングで Global Issues を学ばせる
（法学部：前田幸男准教授）
- 多人数履修科目におけるグループ・ワークの取り組み（文学部：玉井秀樹教授）
- グローバルマインドの涵養を目指して - 国際看護系科目の取り組み
（看護学部：佐々木諭教授）



学部での実践紹介

国際教養学部

「国際的な質の保証への取組」 ■ 国際教養学部教授 小出 稔

現在日本の大学は競って英語による授業を増やしています。しかしながら、個々の授業を英語で実施することが直ちに国際的質の保証になるわけではありません。大学全体として適切な自己点検・外部評価システムを構築し、各学部等のカリキュラムが国際的通用性を有して初めて、個々の授業を英語で実施することが国際的質保証につながり、海外諸大学との単位互換等も可能になります。

海外大学間の単位認定においては、英語によるシラバスに毎回の授業テーマ、使用教材、課題と評価方法等が具体的に示されていることが重要です。その意味で、本学のシラバスは、国際標準を意識した項目で構築され、シラバスの英語化と公開を通じて、高いレベルで国際的質保証の前提を満たしていると思います。

全学的な国際的質保証の推進の結果、国際教養学部の私の授業でも、学部生以外の留学生の履修者が増え、学部生からは「まるで海外の大学に留学しているみたい」との声も上がっています。留学生の多くは、帰国後自身の所属する大学での単位認定を前提に国際教養学部の科目を履修しているため、毎回の授業への取組も真剣です。多様な国・地域からの留学生は、日本人学生の学修も大いに刺激し、国際教養学部をはじめとする本学のEnglish Medium Programsの質保証の観点から大きな資産といえると思います。今後も全学的な国際的質保証の取組の好循環の中で、自身の授業の質を高めていきたいと思っています。

経済学部

「数理科目での反復演習によるアクティブ・ラーニング」 ■ 経済学部准教授 中田大悟

批判はあるものの、経済学は応用数理学である。しかしながら、わが国の大学制度における「文系/理系」という意味不明な分類上、経済学部は文系学部に見做されており、経済学部で学ぶ学生は概して数学を苦手としている。数学を嫌悪する学生に、数理学である経済学を理解してもらうには、途方もない困難が伴う。

これに対する正攻法の対策は、時間をかけて解説し、豊富な練習問題を用意することであるが、必ずしも機能しない。数学を嫌う学生は、練習問題を「こなす」ことに躍起になり、短期記憶で対応しようとする。筆者はミクロ経済学の講義を担当しているが、この講義は上級専門科目の基礎といえるものであり、可能な限り内容を論理的に理解してもらいたいが、一部の優秀層の学生を除き、目標の達

成はなかなか難しい。

そこで講義内に、アクティブラーニング手法の演習を積極的に導入した。具体的には、基本的な練習問題(例題を改変した程度のもの)を学生自身が自作し、模範解答まで用意した上で、他の受講生と共にそれを解き合って、思考方法、解法に対する理解を深める場を設けたのである。

発想としては単純な手法であるが、効果は抜群であった。例年に比して、初歩的理解で躓く学生は格段に減った。講師だけでは届けられない指導や助言が、学生間で内生的に発生したことが重要であった。学生の学ぶ力を引き出せるかどうか教育の要諦なのだと、痛感した次第である。

法学部

「TEDを素材としたアクティブ・ラーニングでGlobal Issuesを学ばせる」

■ 法学部准教授 前田幸男

2017年度第7回学士課程教育機構FDセミナーにおいて、法学部専門科目の中のオールイングリッシュ科目の教育実践例を報告しました。内容は「TEDを素材としたアクティブ・ラーニングでGlobal Issuesを学ばせる」というものです。

この授業の核は、TEDのテーマ毎にカテゴリー化された複数の内容を組み合わせて学生が主体的にプレゼンを行う点です。90分の講義の内訳は、①トークの要約とQ & A (25-30分)、②分析(比較考察・課題抽出・問題解決策の提案)(10分)、③Q & A (5分)、④ディスカッション(25-30分)、⑤シェア・タイム(5-10分)といった構成になります。

学生の評価は、以下の(1)~(5)の総加算で行います。すなわち、(1)小エッセイ(10%)、(2)期末レポート(20%)、(3)グループ発表(1×30=30%)、(4)TED

の事前学習と気づきの事前入力(Pre-learning)(10×2=20%)、(5)発表へのフィードバックとLTDで気付いたことの事後入力(Reflection)(10×2=20%)です。特に(3)のグループ発表の評価は、学生による評価で決まります。これが反転授業を質的に支えます。

こうして「TED×LMS×反転授業×LTD」というアクティブラーニング・コンプレックスに学生を参加させながら、口頭によるプレゼンをその場限りにせず、内容を可視化しながら記録します。それによって共有知へ履修者全員がいつでもアクセスできる仕掛けを作りました。近年、文系理系を問わず、「AIによる人間の知能の乗り越え」という挑戦(シンギュラリティー問題)を前に、様々な分野で創造性の涵養が喫緊の課題となっていますが、それに対する一つの応え方になればということをお伝えしました。



大学教育再生加速プログラム

「大学教育再生加速プログラム (AP) 事業報告会 (第8回FDセミナー)」を開催

2018年2月24日(土)、2017年度第8回学士課程教育機構FDセミナーとして「大学教育再生加速プログラム (AP) 事業報告会」を本学中央教育棟AW402教室で開催しました。

はじめに馬場善久学長が、「AP事業の採択より4年目を迎え、本学では様々なアクティブ・ラーニングの手法や授業設計の振り返りを通じて、授業改善を進めてきている。今後は、PDCAサイクルを意識し、学生一人ひとりが能力を伸ばし、社会で理想を実現できる手助けができるよう、さらなる教育改善を進めていきたい」と挨拶しました。

続いて、玉川学園理事・玉川大学教授の菊池重雄氏に「高大接続改革と初年次教育」と題して講演いただきました。内容は、①単位の質実化と教育の質保証による「学修」の促進、②3ポリシーのエンロールメント・マネジメントとガバナンス改革を通じた大学教育の質的転換に基づく高大接続改革、



③学生に、自己を表現、肯定しながら集団に所属する方法を学ばせ、強靱な個人にする日本型初年次教育モデルの構築についてでした。菊池氏は「変化する時代に必要とされるのは、会社のために消費されていく人材ではなく、自ら成長し続ける人的資本としての人材である」と人材育成の必要性をお話になり、講演を結ばれました。

最後に、総合学習支援センター長の関田一彦教授が、2017年度のAP事業における成果指標の達成状況と今後の取り組みなどを報告しました。

参加者からは、「AP事業や大学のカリキュラムを全体として確認することができた。学部の専門性の中で掘り下げて取り組んでいきたい」、「初年次教育の大切さを実感した。スムーズな学修へ入れる取り組みをさらに工夫し、教育効果を上げていきたい」などの声が寄せられました。

2018年度学士課程教育機構FDセミナー・教育フォーラム 開催スケジュール (予定)

■ 学士課程教育機構FDセミナー

回数	開催日	講師	演題
第1回	5月25日(金)	児美川孝一郎氏 (法政大学教授)	夢があふれる社会に希望はあるか
第2回	6月16日(土)	安永悟氏 (久留米大学教授)	LTD入門
第3回	6月22日(金)	堀真寿美氏 (NPO法人CCC-TIES)	電子書籍入門 (ChiLO Bookの紹介)
第4回	8月28日(火)	新井紀子氏 (国立情報学研究所)	AIにできること・できないこと
		堀有喜衣氏 (労働政策研究・研修機構)	大学から職業への移行における課題
第5回	10月12日(金)	玉田玉秀斎氏 (講談師)	プレゼン力を高める講談の話術力
第6回	11月9日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ1
第7回	11月30日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ2
第8回	12月14日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ3
第9回	2月23日(土)	AP事業成果報告会	

■ 第4回教育フォーラム

開催日時……2018年7月14日(土) 13:00~17:10

場 所……創価大学 大教室棟S201教室

基調講演①…「グローバル化する社会におけるコミュニケーション」 平田 オリザ 氏 (劇作家、演出家)

基調講演②…「国際バカロレア教育が育てる地球市民」 大迫 弘和 氏 (武蔵野大学 教育学部 教授)

本学の取組紹介

◆2018年8月23日(木)~24日(金) 大学コンソーシアム八王子 第8回FD/SDフォーラムが開催されます。

学士課程教育機構 新任教職員紹介

■ 教員

学士課程教育機構 准教授…上原正樹
助教…内田さくら、西尾広美

WLC 講師…府川哲子
助教…ジョナサン・エクスタイン、ラトール・チャンダール・シン



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第15号
発行日 2018年5月15日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<http://www.soka.ac.jp/seed/>